

---

**【全年齡版】好きです、付き合ってください。**

透風真白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

### 【Nコード】

N1799Z

### 【作者名】

透風真白

### 【あらすじ】

可愛らしい顔立ちでふわふわの茶髪、猫っ毛の彼は、学校でちょっとした有名人。そんな彼から告白をされました。どうしてだろう。だって私は、女なのに。同性愛の言葉が作中出てきますが、直接的な描写はありません。当作品はボーイズラブではございません。ご了承ください。ムーンライトノベルズにて連載中の同タイトル作品の全年齢版になっております。同じ作者の作品なので無断転載はございません。

## 第1話（前書き）

こちらだけ読まれていた方は、お久しぶりでございます。お待ち致しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

## 第1話

「好きです、付き合ってください」

お決まりの文句を言われ、はあ、と短く反射で声を発した。

どうしたものだろうか。目の前の光景は実に信じ難い。というよりも、信じなくて良い。と、誰かが告げている。いや、私の頭には特に何も住んではないが、いわゆるあれだ、自分会議というか。そのようなものだ。

昼休みに呼び出され赴いたのは人気のない校舎裏。ここまですれば大抵の人間はどんな用向きか察しはつくのだが、目の前の人間を前にして、それはありえないだろう、と結論を下した。

それは私自身が異性に好意を示された事が皆無であるからだとか、容姿、人格共にごくごく一般的かそれより多少下ではないかと自負しているからであるとか、高校2年生にもなって発した言葉の意味を正しく理解していないほど純情であるとか、そういった私自身の問題で結論を下したわけではないとどうかご理解いただきたい。

緊張した面持ちで私を見つめる彼、在籍クラスはどこか忘れたけれど、同学年の佐藤昂君。

接点は恐らくほとんどないだろう。同じクラスになったこともなければ、何かの係で同席した覚えもない。どういうきっかけで私を知ったか。そういった細かい事はひとまず置いておこう。

何故、私が彼を知っているか。

それは、彼が学校内の有名人であるからだ。

「……じゃあ、帰りはいつしよにかえろう」  
「へっ」

頭の中で色々と整理していたら、目の前の彼が満面の笑みでそ

んなことを発言してきた。

「おや、どうしたことだろう。なんだか彼がひどく輝いて見える。頬を染め瞳を潤ませ、まるで乙女のようににはにかんでいる。この瞬間を写真に収めたならば、男女問わず買ってくれそうだ。佐藤プロマイド、一枚いくらだろうか。儲かるだろうか。」

「それじゃあ、またあとでね！」

嬉しそうに手を振って去って行く彼に慌てて声をかけようとしたが、驚きのが勝って、これは最初の返答で男女交際を承諾したと知られているなとわかつてはいたのだが、私はそれほど真剣に呼び止める事をしなかった。そもそも、彼も本気なわけではないのだから、誤解をとりあげようと親切心を発揮してやる気にもあまりなれなかった。

だって彼は、男性しか愛せない人間であるはずなのだから。

ふうむ、と顎に手をやりながら私は校舎へと戻る。あまりぼんやりしていると、昼食を喰いっぱぐれる可能性がある。正直、空腹をほっておいてまで挑むべき疑問ではない。

図書室へと戻れば、すでに弁当を広げている友人が興味があるのか、戻って来た私に話しかけてきた。

「佐藤君、なんだって？」

当然くるであろう質問に、私は困った顔でお弁当を広げつつ、首を傾げた。

「うーん……わかんない」

期待はずれな私の答えが不満だったらしく、ぴくり、と片眉を上

げ、ふうん、と声をあげる友人に、付き合ってくださいとは言われたんだけど、と正直に話した。すると友人はよほど驚いたのか、口をあぐりと開けて固まった。なんとも珍しい姿である。

数秒待ってもそのままなので、食欲旺盛な私は友人の弁当箱にあるウインナーへ手をつけた。律儀にタコ型になっているそれを見て、友人の母はちよつとした所で芸が細かいな、と感心する。全体的に女の子のお弁当といった風情でとても可愛らしい。自作している私の今日の内容はのり弁当だ。弁当屋に並んでいたら美味しそうにうつるだろうが、女子高生のそれとしては少々彩りが少ないかもしれない。

戦利品を口に含んで咀嚼した所で、やっと我に返った友人は私を無言で睨みつけると一気に冷気をあびせてきたがさもありません。絶対そうだとは言わないが、所詮この世は弱肉強食、と断言してしまった人もいたではないか。

とはいえ好奇心が勝ってやらかしてしまった悪戯。さらに怒らせたくはない相手を怒らせてしまったのは事実。私が無言で卵焼きをさしだせば、友人はころりと機嫌を直した。

「……でも、それってありえないでしょ？」

まだおかずが入った状態のまま喋るのは少々行儀が悪いが、話の流れを切つてまで今それを指摘する必要性を感じなかったので私は心に留め素直に頷いた。

「まあね」

「千絵子はなんて返事したの」

「そこ」

友人の質問に、私はか、と目を開く。

そう、つまりはそれが問題だ。先程たいした問題じゃないと一蹴

したがそこはそれ。空腹の前には瑣末な事柄であったがもりもりと腹を満たしていけば冷静な思考も戻るというものだ。相手が本気でないにせよ、承諾してしまった以上面倒な方向へ転がる可能性は高い。

難しい顔をして弁当を貪りつつ説明すれば、なるほど、と友人が頷いた。

「つまり、なんとなく声出したらそれがイエスという意味にとらえられた、と」

「そう、それ」

「変なところで抜けてるのよね、あんた」

苦笑して私の頭をやりわり叩く友人の大人びた表情に一瞬見惚れながら、この友人はとも美人なのである、私はぼんやりと考える。とにかく、告白がまがいものであるのは間違いがない。だからそこを指摘すればいい。そうすれば私は解放されるはずだから。

解放。はて、私は一体全体何にとらわれたというのだろうか。首を傾げながら物思いに耽る私は、とりあえず食べちゃえば、という友人の声に反応して食事を再開した。

先程の友人との会話でわかるとおり、佐藤昴氏のそういつた恋愛観は、実は学校中に知れ渡っている。なぜかといえば、ある日ある女子から告白をされた佐藤君が、にっこりと微笑んで「僕は男性しか愛せないからごめんね」というお断りの返事をしたのである。

それから新たな噂が流れ、どうやら佐藤君は同じクラスの幼なじみである男にずっと懸想しているらしい、と知ってから、一部すきものの女子はそれに興奮を覚え、その他の人間も変に面白がって学校全体がそのふたりを応援する図が成立してしまっている。

「…………あれ、てことは私は邪魔者になるのか？」

昼食を終え歩く廊下で、腕を組みつつ眉間に皺を寄せる。

学校全体の敵にも成り得てしまう状況に、私はちよつと心穏やかではない。ひよつとするとこれは思った以上に深刻なのだろうか。

これはあくまでも仮定だが、たとえば、たとえば何か、私に声をかけねばならぬ事情があった。私ではなくても良かったのかもしれない。とにかく、異性に告白せねばならない窮地に佐藤君が立たされてしまったとしよう。そうして、告白された私が、「いいよ」と誤解にせよそうやって返答してしまったという事実が今はある。当然、佐藤君はお付き合いをするしかない。みずから告白したのに、了承されて手の平を返すのはおかしな話だからだ。

そもそも、断られる前提だったのかもしれない。全校生徒が噂を知っているのだから、断られると思うか、疑問を呈すだろうと予想するのが普通だ。ひよつとすると、想定外の結果に私以上に彼が狼狽しているかもしれない。

そこまで思い至って、なんとなく悪い事をしてしまったか、と気になった。

いや、多分この場合、悪いのは佐藤君になるのだが、のつぴきならない事情があるのならば私はそれを聞くくらいの見は持ち合わせている。気はそうそう短いほうでもないし、今現在私に想い人がいないのも一因だ。誤解されて困る相手がいなければ、焦る必要もない。

ひよつとすると、好きな男性に何か言われたのかもしれない。へんな賭け事でもしたのかもしれない。あるいは。

とにかく、現段階ではあれこれと思考を広げすぎても仕方がない。ある程度の想定をして準備をし、彼の話の聞きこうではないか。

教室に戻って席に着いた私は、そういった方向性で話を纏めていた。

「野田さん」



放課後の教室にわざわざ迎えに来てくれたらしい佐藤君を見て、クラスメイトが不思議そうな顔をそれぞれ私に向けてくる。今まで接点など何もなかったのだからそれはそうだ。

佐藤君は、とても可愛らしい顔立ちと茶髪の柔らかい猫っ毛から、どこかなにかの動物を連想させる。背はそれほど低くもないが、見た目通り性格もひとなつこい雰囲気があるからか、皆に愛でられている傾向がある。

恐らく、彼が同性愛者であると公言しなければ、もっと頻繁に告白をされていただろうし、女性をちぎってはなげ、なんてことも出来ただろう。本人がそれを望むのかはわからないが。いや、男性だって、付き合いを了承するひとはたくさんいるかもしれない。

そんなしょうもないことを考えつつ、名前を呼ばれ無言で彼の前まで歩いていくと、佐藤君は微笑みながら私の手を取った。

少し驚いて身体を強張らせると、目の前の佐藤君が表情を曇らせた。

彼に動物のような尻尾が付いていたならば、きつとしょぼん、と萎れていたに違いない。泣き出しそうな顔をしつつ、弱弱い声で私に問いかける。

「嫌だった……？」

哀しそうなその声に、私は無言で首を振る。そもそも、強く拒絶する理由も見当たらない。別に私は彼を嫌いではないし、手を握るくらいで頬を染めるほど男性を意識してしまうわけでもない。

それにしても、解せないのはこの行動だ。

嫌々付き合っているのなら、こんなことするのだろうか。私の言動に一喜一憂するのだろうか。それとも、これもなにかの条件で、演技をしなければならぬ理由があるのだろうか。

考えつつ辿り着いた昇降口で、靴を履き替える。つながれていた手が離れて安堵の息を吐き出したということは、なんだかんだ多少

緊張していたということだろうか。心に余裕が出来た所で、私は口を開いた。

「佐藤君」

「なあに？」

相変わらず微笑んだまま、靴を履き替えた私の手を再度取る佐藤君。こうやって異性に触るのは、彼は嫌ではないのだろうか。

「まずちよつと謝罪しておきたいんだけど。私はあなたのお付き合いを了承したつもりはないの」

「え？」

「そもそも、佐藤君は私が女性だと知ってるはずでしょう？あなたは異性を恋愛対象として見れないんじゃないの？」

無言で固まる佐藤君の前に、私はとりあえず頭の中であれこれ考えていたことを口にしてみる。

「私、佐藤君が言ったことにびっくりして思わず声あげちゃったんだけど、それを勘違いして了承の返事にとっちゃったんだよね？それは謝罪させて、ごめんなさい。ただ、何か事情があるんなら、聞くのはかまわない。罰ゲームとかで告白しなきゃいけないとかそういうのなら、今すぐこの場で終わらせよう。好きでもないのに付き合ったりするのは苦痛だろうし、佐藤君が好意を寄せてる人に色々誤解されたら嫌でしょう？」

伝えたいことをとりあえず伝えて、彼の反応を待つ。すると何かを思案しているように顎に手をやり黙り込んだ佐藤君は、しかし一分もかからないうちに顔を正面に戻した。真剣な表情で私をみつめる。

「わかった。本当は……何も言わないでおこうと思っていたんだけど、それは卑怯だね、ごめん。覚悟して事情を全部話すよ」

真剣な表情になった彼につられて、私はごくり、と唾を飲み込んだ。

「でも、ここでは話せないから……場所を変えよう」

頷きながら私は彼にひかれ歩き出す。しかし、やっぱり手は離さなくていいのかな。私は気になって訊ねると、そのままでもいいんだと微笑んで答えられた。

ひよっとして、事情とやらにこれの理由も含まれているのだろうか。少しうずく好奇心が、多少彼の言葉を急かすけれど、話してもらえることにかわりはないのだから、と無言で彼と帰り道を歩いていた。

## 第2話

季節は初冬だけれど、今日は春のように暖かい。小春日和というのは、一体いつからいつの言葉であったかわからないから、心の中でも使ったらいけないわかないし、なんて思っていたら、目的地に着いたらしい。少し前を歩く佐藤君の足がぴたりと止まった。

見れば、なんの変哲もない公園だった。遊具もそんなには多くないからか、夕日がぽっかりと浮かぶ空のこの時間帯にはもう子どもはいなかった。カップルが訪れるにはまだ早いかもしれない時間で、つまりは誰も居ない空間のベンチに、すすめられるまま私は隣りあわせで腰かけた。

離された手を一瞬視界に留めてから、佐藤君へと視線を向ける。

佐藤君は、正面を向いてなにやら考え込んでいた。

恐らく今は声をあげないほうがいい。彼の言葉をじっと待った。

「……知ってた、んだね」

「？ は」

ぼつ、と呟かれたその意味が一瞬わからなくて、思わず短い返事のような声を発してしまう。そんな私の曖昧な音に困ったのだろう。疑問符を浮かべた顔でこちらを見てくる佐藤君に少し慌ててごめん、と返した。

「意味がわからなくてだね。ええと、知ってたとは？」

「あ、そういう喋り方が素なんだね。そっちのほうがいい感じだ。僕で僕で嬉しいな」

いや、今そんな話じゃなかったはずですけど！？と、思わず脳内でつつこんでしまったが、口に出していないから問題はなからう。

確かに、先程は少々気取った話し方ではあつたろう。けれどもほぼ初対面でありながら巻き込んだ責任感からなのか、彼は私に重大な何かを話そうとしてくれている。それならば、私も本来の姿で臨むのが礼儀であろう。と、思わなくもない。

いいや、単に勝手に素うどんな私が出ただけである。言つててうどんてなんなのだろうか、とやはり自身に問いかけたが、所謂その場の勢いであつて、深い意味はないよ、と回答された。そうですか、わかりました。

夕日に照らされる空を一瞬見上げ、美味しそうな色である、と食欲ばかりに結び付けたがる思考を少々叱りつつ、私は佐藤君へと向き直つた。

「素とか素でないとか、今は置いとかんかね？とりあえず、さっきの。どういう意味なの？知つてたんだねって何が？」

私の言い様にしょぼんとしながらも、再度の質問に佐藤君はああ、と頷く。

いや別に、本当の私なんて知らないくせに、とか素とか素でないとかそんなの知らないよ、とかそんな風に思つていたわけでは決してないんだ。そんなに情けない顔をしないでくれまいか。悪い事をしてしまつたみたいだ。ただ、目の前にぶらさがつたままの疑問を優先させてしまつただけなのに。言い方が少しきつかつたろうか。

ああ、と言つてから、彼の言葉がどうにも続かないので、私はぱたぱたと左手を上下に振つた。あらいやだ奥さん、とかおばちゃんが出てくる仕草そのものだ。それにたいして別に若人である私はなんら抵抗を感じない。ちなみになぜ左手なのかと言つたら私が右、佐藤君が左側に座つたからだ。

「あのさ、佐藤君。別に私は言われて憤慨したわけではないのだよ？ただ、さっきの言葉が気になつちゃつただけでさ。この喋り方が

お気に召してくれたんなら私としても気が楽だよ。かしこまんなくていいってことなんだし」

わはは、と笑い声も付けながら言えば、佐藤君は萎れたしっぽをぶんぶんと振り出した、ように見えた、実際に彼の尻から尻尾が生え出したわけではない、ので、私は安堵の息を吐く。

というわけで、仕切りなおした。なんだかなかなか先に進まないではないか。

「知ってたんだって言うのは、僕の恋愛対象が、その」

言い淀む佐藤君の言葉を引き継いで、私は声をあげる。

「同性愛者？」

「……知らないんだと思ってた」

「学校内で知らないひとはいないと思うけど」

苦笑する彼に、私は頬をかく。どうしてそんなに、まいったなあ、って顔をしているんだろう。でもそうか。ということは、彼は私が佐藤君が男性が恋愛対象であるってことを知らないと思ってたわけだ。そして今、彼はその事実直面してどうやら困っている。何かを隠したまま、私とお付き合いを継続させたかったんだろうか。それは一体なんだろう。きっと、その理由はこれから話してくれるのだからうけれど。

そんな事を思っていたからだろうか。佐藤君が意を決したかのように正面に向いていた顔をこちらにぐるり、とまわしてきた。

近くで見ると、やはり整った顔をしている。その整った顔は今、

私を真剣に見つめているのだと思うと、妙な緊張感が生まれてきた。

口元を注意深く見つめていれば、元々ゆっくりとだったからなのか私の目の錯覚だったのかはわからないけれど、佐藤君が唇を開く

瞬間がまるでスローモーション映像のように私の瞳にはうつった。

唇の形すら、綺麗だ。

そう思ったのと、彼の声が耳に届いたのは同時だった。

「わからないんだ」

「え？」

反射的に聞き返すと、佐藤君はまた正面を向いてしまった。ああ、私は彼の可愛らしい顔を真正面から見たいとどこかで思っていたようだ。無意識下の自分に少し驚く。

「僕は、本当は女性が苦手なだけなんじゃないのかなって。ひよつとすると、男性が好きなんじゃなく、ある種の恐怖症のようになってるのかもしれない」

佐藤君の告白に私は目を丸くする。ええと、それはつまり。

私は頭の中で考えを整理していく。

女性不信、女性恐怖症。女性に嫌悪感を抱く。まあ、とりあえずなんでもいいが、そういうった感情を女性に抱きがちな男性がいたでしょう。しかしそれじゃあ、その男性が同性愛者なのかといったらそれはまるで違う話になるだろう。それは、女性に当てはめれば何かのきっかけ、たとえば某かの行為、痴漢であるとか、で、男性全般が恐怖の対象になってしまった。として、その女性は同性愛者か？やはり違うと言えるだろう。

私たちは、まだ16、7そこそこの小坊主、小娘、俗っぽく言えばガキ、である。と同時にとても多感なお年頃だ。不安定で、思い込みも激しいところがあるし、まだまだ自分の考えに確固たる何かを見出せる年齢とはとてもではないが言い難い。そんな我々が、そういうった感情を勘違いしてしまう事は、決して有り得ない話ではなからう、とこの時私は結論を下した。

でも、とここで私は疑問を抱いた。

「あの、気分を害さないで聞いてほしいんだけど。今現在の想い人って、あくまでも噂だけれど、同性の幼なじみなんですよ？その人の事は、どうなの？佐藤君は好きじゃないの？そうじゃなくとも今まで好きになった相手は？」

私の質問に、佐藤君は特に不快感を抱かなかったようだ。顎に手をやり、そこなんだ、と声をあげる。

「僕は、ずっとそう思い込んでいたから、幼なじみの事もそういう対象としてみていると思ってた。でもね、少し前に言われた一言で、僕は何もかもわからなくなった」

ほほう。その一言とは一体なんぞや。

心で呟いたすぐあと、彼から答えが返ってくる。

「お前が俺に抱く感情は、友情とどう違うんだ、って」

「！ ほう、それはそれは」

「……とっさに、言い返せなくて。思えば、恋人同士でするような事を今まで好きになった人たちとしたいと思っただけだったかもな」

恋人同士でするような事。

その一文を聞いて頭の中を流れたあれやこれやは、まあ外れてはいないんだろう。そういうことを、佐藤君は今までしていないということがある。

私も誰かと交際した経験がないからわからないけれど、きっと好きな人とはそういう行った行為もしたくなるのだろう。自然と、求める心も生まれてくる、はずだ、恐らく。



物質的な何かを求めるのは、そもそも若ければ若いほどそういう衝動は大きいんじゃないのだろうか。男性側は特に。わからないけれど。さっきからわからないけど言い過ぎているけれど。

戸惑いつつも、好奇心からなのか。私は気付けば口を開いていた。「キスとかもあまりしたいと思わないっていうこと？またはしたことがない？」

さすがにこれには答え辛かったんだろう。一拍置いてから、佐藤君が見る見る頬を染めていった。瞳を潤ませて戸惑うその表情は、そんなつもりがなくともなんだか変な気分になる。別に私はどこぞの中年ではないのであるが。可愛すぎる君がいけないんだ、という男前なセリフが私の脳を突き抜けていった。もちろん、声に出して言うほどハッピーな人間ではない。

「その、したことは……」

「！ あるんですな」

なんか若干変な言葉遣いだけど気にしてはいけない。動揺が隠しきれなかったのかもしれないし、単に興味津々になってしまったのかもしれない。案外私も野次馬根性が盛んであったのか。

真っ赤になつてうつむく可愛い男の子にどうしたらいいかわからずしばらく無言でいたが、やがて佐藤君はぽつぽつと呟くように話し出してくれた。

「その、なんていうか、僕からというよりも向こうから半ば無理やりっていうか。その時も、気持ち悪いまではいかなかったけど、かといって良くもなくて。手を繋ぐくらいで十分だと思えたし、それもたまにじゃれあいみたいのがあればそれでいいな、って」

「ああ……なんか男子ってたまにアグレッシブな遊びをやっつてのけ

てますのう、そういえば」

なるほどなるほど、と頷きつつ、彼の言葉を聞く。そうか、それならば確かに……微妙、といえるかもしれない。いや、男性を愛する気持ちはあるが、ひよっとすると女性も特別に無理、というわけではないのかもしれないという可能性もある。つまりはどちらも、という人々。そこらへんは詳しくわからないけれど、いずれにせよ、佐藤君が言いたかった真実を大体把握できた。出来た、けれども、はて。

「……私は、なぜあなたと付き合わなければならんの？」

首をこてん、と傾げつつ佐藤君の方を向く。

私の言葉に佐藤君がば、と俯いていた顔をあげる。興奮状態なのか、立ち上がって何かを言おうとした、矢先。

私のお腹が、暴君の如く痙攣を起こした。

「……とても元気な腹の虫だね」

佐藤君が気を遣って言葉を選んでくれる。でも、その綺麗な顔は引き彎っていた。私は気にせず自然に微笑んでみせる。

「優しい言葉をありがとう。……ふむ、現在時刻は17時。暗くなってきたしそろそろ帰るか場所を移動するのがよろしかろうて」

「？ 移動」

「腹が減ると人間それを最優先させる傾向にあるから、どうにも思考が短絡的になっていけない。であるから、空腹は満たすべき。真剣な話し合いをする前ならば尚更。というわけで佐藤君、この後のご予定は？」

とくとくと語る私に、面食らったのだろう。  
目を丸くした佐藤君は、立った状態のまま勢いを失って戸惑いの表情を見せた。

「いや、特にありません」

多少情けない声になっていく。なんだか申し訳ないが、目下、最優先事項はこの腹減りをどうにかすることである。

「お家で誰かがご飯を用意していたりは」

「いや、僕の家、両親共働きで、母親がけっこう作り置きしてくれてはいるんだけど、今日は外食用のお金をもらってるんだ」

「それはそれは。ではおいでませ」

「？ おいでませ、ってどこに」

佐藤君の問いかけに、私は微笑んだ。

野田という表札が出ている一軒家。所謂住宅街にあるそれは、ごくごく平凡なものだ。しかし私の隣に立つ男の子は、それをとても珍しい何かのようにまじまじと口を開いてみつめていた。

なんだかその反応がおかしくて、笑った。

「佐藤君、固まってないで入りなよ」

「……えっ、いやでも」

「別に遠慮しないでどうぞ。誰もいないから」

「ええっ!?!」

私の返答に更に驚く佐藤君。なんなのだろうか。とにかく私は早くこの空腹をどうにかしたいのだ。

「いいからほら。タダメシ食らうからには手伝ってもらうからそう  
気にしなさんな。早くはやく」

「お、おじゃま、します」

私の言葉に観念したのか、観念という言葉もなにやらおかしいが、  
佐藤君は戸惑いつつも玄関へと足を踏み入れた。

リビングに通して、少しだけ待つように告げれば、私は二階の自  
室へと足を運ぶ。

少し急いで着替える。いつもの部屋着だ。料理するのに格好を気  
にするのは良くない。佐藤君はもう私の中でお客様っていう立ち位  
置でもないから、外見を気にかけても仕方がない。

少し早足で階段を駆け下りて、ごめんね、と佐藤君に一声かける  
と、佐藤君が固まった。予想はしていたけれども。

「……………それ」

「中学校時代のジャージ。便利だよ、汚れても気にならないから。  
ほれ、これをお使い。ブレザーは脱ぎんしゃい、動き辛いだろうか  
ら」

四人がけのダイニングテーブルの上にあったエプロンを佐藤君に  
投げてよこせば、彼は慌ててそれを受け取った。よしよし、言うと  
おりに装着しましたね。

「佐藤君、料理の経験は」

「ごめんなさい、ほとんど……………」

「謝らんでよろし。覚えておくと便利よー、今は男も料理作れると  
ポイントが高い！らしい」

「……………野田さんは、料理作れる男のが好き？」

佐藤君の質問に私は腕をまくりつつ手を洗ってうーん、と声を上

げる。特にそうだからってわけではないけれど、まったくしない人や、家事労働に抵抗のある人よりもやってくれる人のが良いのは確かだ。特に偏見かもしれないけれど、男のするものではない、と言っている種類の方は、日々のお礼を怠る傾向がある気がしてならない。たとえ全く手伝ってくれずとも、美味しいよ、ありがとう、という言葉の威力ははかりしれない。私は、物心ついた時から毎日当たり前のように家事をこなしているけれども、正直、両親の感謝の言葉がなければ、もっとひねくれていたと思うのだな。

そんな事を頭の中で反芻する家事労働と交えつつ考えながら、私は頷く。

「そうだね、私はいつしよにやってくればかなり嬉しいな」

「！ 僕でも出来ることってなにかな、なにしたらいい？」

佐藤君がブレザーだけでなくネクタイも脱ぎ捨てて腕まくりをした。急にやる気を出してどうしたことだろうか。でも非協力的よりずっと嬉しい。私は微笑んでそれじゃあ、と口を開いた。

「あーあー、そんなに正確じゃなくていいんだよ、要は食べやすきやいいんだから」

「そういうものなの？」

「そうそう。こうやって一回切るごとにくるつとまわして」

「そうやって切るんだあ！」

見本に横でにんじんを切ってみせるだけで、佐藤君は感嘆の声をあげる。なかなかどうして良い生徒だ。微笑ましい思いで私は佐藤君の手元を見やる。

「うん、うまいうまい。あ、にんにくは苦手？」

「！ ううん、むしろ好き」

「よかった。じゃああとは、サラダ作ってもらおうかな？」  
「はい！」

大変良いお返事ですね。

「ごめんねー、ぜんっぜん凝った料理でもなんでもなくて。でもご飯はガーリックライスにしたから一手間かかってますよ！」

「いや、十分だよ！カレーって久しぶりかも」

「サラダは個人的な趣向でミモザサラダにしました、召し上がれ」

「へー、これってミモザサラダって言うんだ。いただきます！」

ミモザサラダ。本当は黄身だけ使っただけど、私はもったいないので白身もいっしょに使います。美味しいよ。

サラダとカレー。なんてことない食卓だけれど、やっぱり誰かと向き合って食べるのは美味しい。両親は別に子どもに無関心な親っていうのでは全然なくて、いつも私を気にかけてくれるし時間を少しでも作ってくれようとはするけれど、出張も多いし夜は遅い事がほとんどだ。だからせめて健康的な食生活を、とふたりのぶんのお弁当も作っているし、それが苦痛ではないけれど、それでもやっぱり寂しいって感情はどこかしらあるもので。

「佐藤君の家も、ご両親忙しいんだ？」

「うん。最近は家政婦を雇おうかみたいなこと言ってたかなあ」

「へえ……」

「なんとかやってくれようとはしてたけどそろそろ限界みたい。僕もかまわないよって言ったから、近々そという人が来るんじゃないのかな」

「そうなんだ。じゃあお母さんの料理食べれなくなるのちょっと寂しいね」

「うーん、そうだね。でも、両親にそこまで無理もさせたくはない

から、そう我儘も言っていられないし。僕は野田さんみたいに家事を一手に引き受けるとか、そういうことも出来なかつたんだから、やっぱりしょうがないかな」

口ぶりから、どうやら佐藤君の家も特にご両親と険悪な状態というわけではないみたいだ。それでもやはり、仕事が忙しければどこかしら心に空間は出来るもので、なんとなく、私たちは空気でそれを感じ取った。お互いにどこか照れ臭くて、誤魔化すように微笑みあう。

「片付けは僕がやるね。ごちそうになった御礼に」

「あやー、そらありがたい。悪いねえ。なんなら明日のお弁当とか作ろうかい？」

「それじゃあきらかに僕のが御礼が足りないんじゃないかな」

「そうかねえ？食器を洗った上に拭いて棚にしまってくれたらとんとんになるんじゃないかな」

「それはそこまですたら作ってくれるってこと？」

「別にかまわんけども。ただかわゆるしいのは作れんよ。ザ・弁当みたいなのしか作れんよ」

「なにそれ」

笑う佐藤君につられて私も笑う。ひとしきり久しぶりの人と食べる晩ごはんを楽しんだ。

それから私はお弁当作りを、佐藤君は後片付けをそれぞれやって、無事佐藤君に完成品を渡し、お茶でも飲むかー、とふたつマグカップを用意した、ところで何かを忘れてるような気がした。

「……千絵子さん」

「ほっ！？」

マグカップに牛乳を注いでいたところで背後から呼びかけられ、とても間抜けな声をあげてしまった。ああこれお茶ではないけれどもお気になさらず、とか口に出しつつも、なんだか少し動揺している自分がいる。

一体全体なんだというのだろう。どこか圧力のようなものを感じなくもない。冷たいシンクに手をついた彼は、背後から私を囲うようにしている。これでは牛乳が温められない。レンジの前に移動させてくれ。

しかし私の願いもむなしく、佐藤君はそのままの態勢でそう呼んでいい？と訊ねてきたので、お好きになさってくださいえ、と私は返答した。

「ねえ、千絵子さんは、さ。こんな簡単に誰も居ない家に男の子を上げちゃうの？」

「ん？んや。そんなあばずれみたいな真似はしないよ？」

「あばずれって」

私の言いようがおかしかったのか、背後でくつくつと笑い声が聞こえる。

「さっきの話を聞いてはいたけどもさ、でもふたりきりになったところで別に佐藤君が私をどうこうすると思えなかったし。だって女の子が苦手なんでしょ？」

「問題は、そこなんだ」

「？そこ」

佐藤君がシンクから手をどかしてくれたので、私は背後にいる彼へと向き直った。振り向けば思った以上に近かったその距離に多少狼狽する。顔、けっこう近いんですね。



「どうして付き合う必要があるのか。千絵子さんはそう訊いたね」

佐藤君の言葉に、私は頷く。

それを見届けたからか、佐藤君はいつかいまばたきをすると、すつと口を開いた。

「僕の女性への苦手意識を、払拭する手助けをしてくれないかな。その為にも、僕と交際をしてほしい」

「……ほほう」

「名ばかりの恋人、というわけじゃない。つまりは、公園で話していたように、恋人同士がするようなことを、僕としてほしいんだ」

「それは、ええと」

「うん、手を繋いだりとか、あの、キス、とか」

あまりの出来事に面食らっていたのかわからないが、私はもう一度ほほう、と呟いていた。

というか、そんな、頬を赤らめて言わないでほしい。そこいらの女の子より美しい。

そういえば、先程一回した佐藤君のまばたきは、とてもとても綺麗だった。

まあ、どうでもいいことだけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1799z/>

---

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

2011年12月8日00時55分発行